

近頃の感想

私はいままでに随分「街」という作品を描いた。そしてその「街」には、しばしば騒音がなく、色彩の氾濫も消えていて、あまりにも静かだった。

都会が一瞬化石のオブジェの街に化してしまう。そんな街が現実にはないとはいえない。

私のタブロオに時に生きものがあらわれる。直線の秩序とのたたかひのあとで、私は曲線への郷愁を感じてしまふらしい。または、直線に曲線との結合を求めているのかもしれない。

芸術の原点にたち帰れという。考えてみる

と、私はいつも自分なりに原点に立っていたような気がする。そうでなければ、不安で絵画の仕事はできなかつたはずである。

すべてが遠い世界のできごとのように思われる日がある。アトリエで自分の作品を眺めながら、自分だけで楽しんでいる絵画の世界だとしたら、やはり不安になるのである。芸術の社会性は、人々の心の共感を得るところにあるのだと思う。

これらの短章は、6月2日より6月28日まで開催される、日本橋の東邦画廊の私の個展の案内状に書いたものである。はじめは美術館のことなどについて書く予定だったが、どうも筆が進まずにこのようなことになり、申訳なく思っている。美術館といえば、札幌に道立の新美術館が建設されることになり、喜びに堪えない。われわれの長いこと待望していた美術館であっただけに、内容も立派なものになってほしいと願うのである。こんど伊豆の一碧湖に池田二十世紀美術館が生まれた。これは個人が集めた内外の作品が常設されている美術館である。日本では非常に少ない美術館の一つになったわけである。これからも日本の新人作家の作品も集めたいそうで、その蒐集のテーマは「二十世紀の人間像」ということである。こういうテーマを掲げているところは興味深く、美術館としても新しい試みではないかと思っている。

難波田 竜 起

会員からのえはがき

岸 葉 子

—花について—



Y.K.



全道展が30周年を迎えます。2回展から出品している私は、今迄30年にわたって参加してきたわけです。近頃、札幌にゆきませんし、お顔も存じ上げない方が多いのですが、私もやはり「我が全道展」と、思っている一人です。でも全道展のことについては、本田さんはじめ多くの方々が、いろいろお書きになられる様ですから、私は花について書いてみたいと思います。

今年、ある会で、ある仕事に、男ばかりでは殺風景なので花を添える意味で岸さんに加わってもらおうことにしようと思った。と、言われました。

私は、私が花たり得るか否かは別として、女だからといって花扱いとは何事です。と、大いにいかりました。作品も含めて女というものが添えものであり、刺身のツマのような存在だ、と言われたような気がしたのです。だんだん、女だって何でも出来るのだ、と、

いばった為、来年は審査の進行係をさせられることになりました。行きがかり上仕方ないことですが、本当は私はそのようなことは大きらいなのです。それどころか、小さな頃から、誰かがお膳立てをして、どうぞ、と言ってくれるまで唯ボーッとしている性分なのです。それに、いくら何でも私は自分が男だと思っているわけではないのに、遂に、私は男だ、みたいなことになってしまいました。その方は、真面目な顔で、わたくしは、岸さんに花になってもらわなくて本当によかったと思います。と言いました。

以前から私は、何かにつけて男は、男は、と言う男の方がおられるのが不思議でならないのです。女が、女、女、といい立てるのは気味わるく、恥かしく、いやらしいのと同じように、男が、男、男、と言いたてるのは、若しかしたらこの人、男であることに自信がないのではなからうか、と、ひそかに、あら

ぬことなど空想されてうす気味悪くなってく
るのです。

私は、男の人間と、女の人間があるのでなく、人間に男と女があるのだ、と思うのです。男、女である前に人間だということです。

先日御来日のエリザベス女王のクインズリをテレビで拝見して、若しかしたら私は、花ということをも悪意に解釈しすぎているのではないかと、フト思いました。私がいかった時の、その方の不思議そうな、びっくりした顔が思い出されます。若しかしたらその方は、僕達は、木の根、木の幹になりましょう。女の方はどうぞ僕達の木の花になって下さい。ということだったのかもしれない。若しそうだったらずい分失礼なことを言ってしまったことになります。これは、いかにどころか、男の方々には余程しっかりして頂く様にはげまさないければ、と、反省しているのです。

折原久左エ門

一飽かず眺めて一



カット 一原有徳

幼時、母親の農作業中に小川の浅瀬にしゃがみ込み、淀みのミズスマシに驚嘆した。2〜3匹が全速で滑り回り競争する。目茶苦茶に激しく、真直に進むことはない。スーッと休息に入ったのを狙い手を伸ばすと前以上に激しく動くが、仲間同志の衝突もない。流れてくる葉つ端も上手に避ける。照りつける太陽を映した光りの黒玉のクルクル泳ぎの乱舞は鮮明に残像している。昼食用に携帯した井鉢で追いまくり、作戦を変えてそとと掬い上げようとして失敗し続け、真夏の午下りに小半日を水に浸って脛が蛭だらけだった。と囲炉裏端の座興にされた。大体3歳頃か？この点は全く記憶にない。

5歳の夏、肺炎に患い、予後は綿入れ着物を着せられて過ごしたが外遊びは厳禁だったし、たまたま、部落の道路沿いの流れにびっしり生え込んだ水草のゆらめきの不思議に魅きつけられてしやがんだ。藻草独特の柔らかさで右、ひだりに絶え間なく揺れ続き、小刻みに起伏する緑の波は清冽な水底にある故か未知の生き物を彷彿させた。気味悪く、離れられない。ツイー、ツイーとメダカが遡上してるなアーと「ぼんやり」になった。見詰め過ぎたせいかわつぶちで「こっくり」しているところを来診のお医者さんの小脇に収まったそうだ。

爾後、戸外に出るのはくどく抑えられたがその後も水草の蠢めきとツイー、ツイーに魅かれて親の目を盗んだ。

人、夫々の成長の過程で眼底に焼き付け、掴み、踏み付けて生傷を作り乍らも先輩（親も含めて）の手引きで知識の世界を少しずつ広げ続け、丁度の頃合いに活字を与えられて广大で奥知れぬ世界を知る。そこに画かれた他人の喜び、哀しみの感情は自身の体験が具体的である程に没入させるのではないだろう

か。

近頃は、引っ張る如く、後から押し出す様
に目前の映像は瞬間に移動し新しいのが現
れ留め定めることは不可能に近い。

時折、発想の纏めにとまどいをおぼえる例
が多い。既にあった様な、何処かで観た様な
工合で決まらない。つい仲間に相談するが往
々にして夫々のアイデアが循環し合って錯綜
している場合もある。

現代は欲しい物、望む事は即刻実現する様
に機能し、又は為べく装置されている。

ややこしい数を知り度いと思う瞬間にボタ
ンを押し、眺めの願望はスキッチを、ダイヤ
ルを切り換えて満たし、百科事典は読書、そ
他の手数を省いて呉れる、今日の問題は評
論家が解説して呉れる。隣の富豪との釣り合
いは分割後払いで整い、手に入れる迄の忍耐
は楽しみ乍ら完済する風に変った。その方が
便利であるし、眼も手も、足も疲れさせず、
頭も痛くさせない。この事象を望んで現代の
機械、装置が、手段が生じ私もその渦巻の中
にどっぷり浸って生きているのが現状だ。本
来の生物的「カン」を働かして一見つけ、動
いて掴む一が出来る様に「便利」を遠ざけて
みるが、やはり試行に終り錯誤とはならない
ようだ。

表出した部分に拠る価値の判断と能率化は
内実の観察や構築の原則の究明に指向させな
い。現代の工芸もその点を反省し、且つ今日
的時代の遺物たるべく制作されておりますが
何しろ国土を数時間で縦断し、瞬時に語り合
える装置を持って「フルサト」を語る環境は
工芸を古いシガラミの中で定住させようとす
る。その点、人影マバラな北海道では便利化
された現代の装置とそこで培養された人心と
を上手に取り、捨てて「将来の古い、新しい
工芸が可能と飽かず考えております。

橋本三郎

一パリからの自宅宛通信一

この図は、私の時々行くレストランで、いつか青山先生がつれて行ってくれた店です。今日も昼食に来ました。ブルターニュ地方の食べもので子供の好むドンドン焼みたいものです。

僕の食べるのは、アルコールの入ったものタネは入りません。一寸甘味があって口にあります。名はゴーマンニュウム。その地方特有のたべものです。デザート？

(16日—3月—1975)

今、ジャンゼリゼーから帰りパバンに寄って絵具を買って一寸ひと休みとキャフェに。

用あり犬屋へ行く、かわいい犬がたくさんいた。その中でこの犬がいて値段が何と、2万フランだそう。支那の犬で猫ぐらい、体に毛がない。丸ハダカ頭に少々ツポに一寸毛があるだけ。さすが支那パンダの国だ。小さくなって。昼間の街には、シャレた毛皮族も多く、女性がチラチラと楽しい。僕はコートを着なかったがさすが寒かった。

4日—2月—1975)

今、朝の5時です。途中眠がさめて眠れないのです。今日のスケッチかもしれない——いや違う、仲々想い出せない、ようやく想い付く。昨日のリュクサンブール公園の樹だっ

たのです。驚いた。昨日のスケッチは何の取獲も無いと思っていたのに、こんな時に生きて来るとは。昨日、冬の樹を見たいと、もう冬が終るので出掛けたのです。だがチットも感興が湧かない。だからだらしがみ付く様に枝の面白さに取り付いてスケッチ、すっかり時間を過し、寒く冷え込んでしまったのですが、そのスケッチが重要な役割を果たすとは考えもしなかった。本当に部分のスケッチも大切にしなければと、つくづく思った。

さっき想いついたアイデアが、次々生きて来るのだ。今、考えている(私のパリー)の中で活躍してくれるであろうこのスケッチの積み重ねが、もどかしく説明出来ないが、ある日突然、生きものみたいに魂が入るのだろうか。今、東洋の主題にこおどりしている。

(27日—2月—1975)

今、金を受取りにオペラに来て、東銀白石さんに会った。これからマチニオンの画廊へ行くところ。こちらは処により新緑が大きくほころび、梅は終り、来る途中、桜が真赤な色をしてまさに咲くところ、セーヌのツボミはまだ固いようだが、このオペラでは芽がほころび出ています。春が早いようだ。

(13日—3月—1975)



サンマロから昨日無事帰りました。さほどつかれも感じません。サンミッシェルは美しい寺院で今は公の建物になっています。おとぎばなしの様な家が並び、海の料理がおいしかった。途中花がきれいので春を楽しみました。

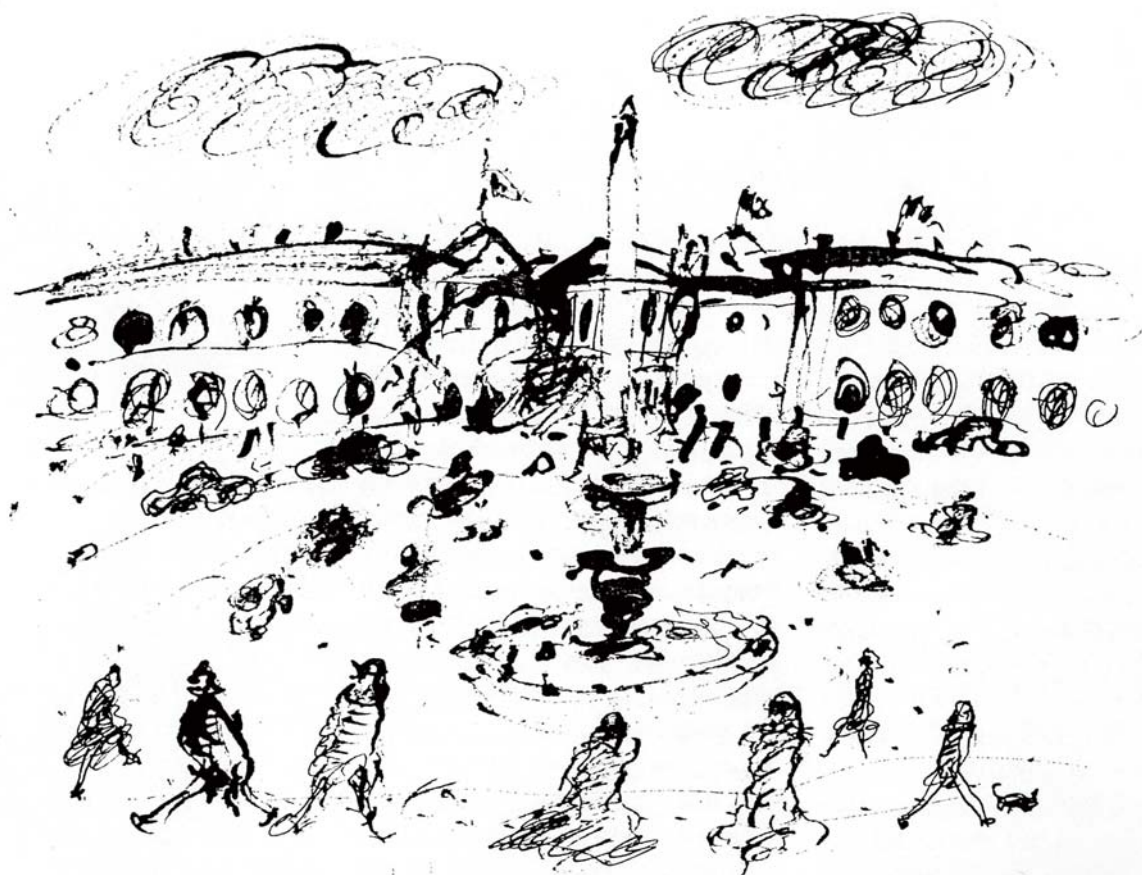
(2日—5月—1975)

今日は金曜で市場に行ってみた。鯛がたくさん出ている。(1kg) 29Fr, カナ頭の大きいので眼がキラツイタのが14Fr, 鮭40Fr, イワシのキラキラ 14Fr, マグロ 37Fr, カレイ 6Fr, 札幌より暮しよいのではないかな? 函館のより味がいい。

(22日—4月—1975)

ここ数日、いろいろな事があった。まず絵が次々出来上がった事、モンパルナスの墓地のスケッチ、何枚もかいた。ついに出来た。仲々調子が出ないで弱った。何日もスケッチに通う。初めて出来たのは自分の部屋の絵。計5点小品が出来た。頑張っている。その内大作をやりま。

(12日—2月—1975)



Place de la CONCORDE

Z. 271111

蛭子善悦

— 邑里・ある一日 —

早朝、猫がノビをして起き、子供が起き、親が起きる。街角の工場の入口ではブルーの仕事着をきた男がもう手を腰に門に立つ。カフェは朝のコーヒーを飲む男たちで一杯。パン屋のママがねむそうな眼付きで焼きたてのパンをくれる。子供たちが青白い顔をしてカバンを背負い学校に向い、ピンクの服装のママは犬の散歩をさせている。冬のこの時間はまだ暗かったのに今は小鳥が鳴き朝の光がやさしい。

近くのプラサでは市がたつ。徐々に朝の柔かさがほぐれ騒がしい物売りの声と共にある一日が始まる。

午前のセーヌ、ビキニ姿の女性が日光浴、この季節には珍しい点景人物なのだけれど誰も気にとめない。無気力な男の眼差しはセーヌの流れをうつろに眺めかたわらの美女の満足気な肢体と好一對をなす。同じ午前、コンソルド広場をメタリック塗装の最新型スポーツカーがのろのろ走る。あまりのロースピードに座席をのぞくと老婆がハンドルにしがみついている。シャンゼリーゼの噴水のそばのポールに三色旗が特別にたくさんはためく西ドイツの旗もたくさん見かける。肩に赤いモールをつけたお巡りさんが幾人も何んとなく交通整理を始める。車が途絶える。やがて数十台のオートバイにすっぽり囲まれたシトロエンDSが通り過ぎる。赤いモールのお巡りさんは直立不動、余程偉い人のお通りだ

ったのだらう。

午後、ルクサンブルグ公園の片隅のベンチで初老の男が靴からパンをとり出し群れ集う雀に手移しに餌を与える。パンを粉にして手の平にのせると雀は手のふちに止りパンをのせると雀は手のふちに止まりパンをついばむ。食べはぐれた雀たちが手を中心に飛び回り今や老人と雀は一体となる。小さなノミの市では店開きのまま昼食が始まる。ロシア人夫婦の店もひやかしの客に愛想をうちながらワインを飲む。食事が終る頃女房の方が酔ってくる。しきりと亭主からみ亭主は客に自分のこしかたの不運を歎く。

午後、再びセーヌ、芸術橋の上ではいろいろな店開き、若い男は自作のペン画を並べ10フランから20フランと値段を示して橋の上に腰を下す。その隣では老人が手まわしの楽器をまわしながら橋行く人の足を止めようとする、メロデーは薄く流れて行く。黒人がネグロ彫刻や装身具をいっぱい並べそのわきでパイプをくわえた中年の男がイーゼルを立てシテ島を描き出す。キャンパスの大きさがサムホール程度なのが面白い。同じ午後、モンマルトルの丘の中腹にある人形店では幾百と言う人形達が薄暗い店内に座ったりぶら下がったり、よりかかっている。美女をピエロがジージーともの憂い音を立ててくびをふり御気嫌をとる。客がチリンチリンと音をたて細いドアを開けて入ってきて又出てゆく。

もう夕方、メニユルモンタンの丘では子供たちが捨てられたガラクタで遊ぶ、パリの街が一望に見はるかすこの丘の上は野良猫が多い、パリを背景に猫たちが塀の上にうずくまる。サンマルタン運河ではハシケが下ってゆく、それを眺める男そして女、ハシケの上では女房が忙がしく働き亭主は水門を開閉する男と長話をしている。ムフタール街は買物客でごった返す、魚があふれんばかりに積み重ねがごそごそはいずり、肉屋の親爺は豚の頭に花を飾り眼鏡をかけ鼻の穴にタバコをさしこむ。

夜、オペラ座の前は一きわ華やか、黒ぬりの大型車が着飾ったご婦人を運んでくる。交通整理のお巡りさんの白い手袋がいそがしく動く、イルミネーションが路上に光る。サンジェルマンのカフェでは若者がゲームに興じ白人女性と黒人男性が隅のテーブルでひそひそ話をしている。犬が主人の話が終るのをあきらめの眼付で待っている。夜更けのオデオン、若い男女が7、8人ギターを奏でながら現れ、消えて行く。サングリアを飲ませる店は紫煙モウモウの中で男は議論に熱中し女はキビシイ顔付でそれを聞いている。

通りは人影もない。黒々と家が並び最上階あれは屋根裏部屋か、明りがポツンと見える。時折りオートバイの音が一きわ高くなり遠のいてゆく。どこかで水を流す音がする。

一日が終る。

田中忠雄

— ゆうえんちの中根さん —

全道展30周年にあたって13人の物故作家の思い出が語られることになっているそうだが、画家ではないが画家にとってはほんとうによい友であった中根さんについて私は書きたいと思う。とはいえ中根さんについてはもっと適当な人がいるはずだがそんなこと言っていると間に合わなくなるから書くことにした。

私の中根さんと知りあいになったころ「お宅は何条の何丁目ですか」と訊いたら……

ゆうえんちの中根で分りますよ
という返事だった。

たぶん今はゆうえんちとは言わないで中島公園でなければ通らないと思うが、私にはゆうえんちは懐しかった。

つまりそれで通るほど中根さんのうちはあの辺では立派だった。奥の離れのすぐ窓の下を創成川が流れていて、児島善三郎さんはそこに起居して札幌周辺の風景を描いていたことがあった。いったいあの部屋に泊めてもらった画家は何人ぐらいあったのだろう。野口弥太郎さん、高島達四郎さん、原精一さんなど、戦後の宿屋に不自由なころにはみんな厄介になった。特に独立系の人が多かったというのは多少の理由は考えられるが中根さん自身が独立の作家にいちばんひかれていたということであり、ひいては彼の全道美術に特別な親しみをもっていたことの説明にもなる。

だが右にあげた人たちはみんな酒が強かった。菊地精二君、中間冊夫君、松島正人君などもこれにつづくのだが、絵ばかりでなく酒でも中根さんの相手になれなければおつき合の資格(?)がないことになる。そういう点で私など資格欠除のナンバー・ワンだったが戦災で家をなくした私には心から同情してくれて、蒲団や食器類などまで戦災者には勿体ないような品をわけて頂いたのだった。

中根さんのうちがどれだけの財産家だったかについて私は詳しくは知らないが書や日本画の逸品は多くは先代からのものであり、油絵は彼の蒐集によるもので、応接間のピアノの上にかけてあった藤田嗣治の50号の裸婦など私の記憶に残っているものだ。洋楽のレコードなんかも随分あったように思う。こうしたやはりこれは道楽ということになるのだろうが財産は減る一方で彼が遊園地の邸を引き払って東京の玉川に移ってきた時はたいていの絵はなくなっていたようだ。

築地本願寺で法要のあった後、別室に集った顔ぶれの多くは全道美術の関係者で、遺品のうち居串君の描いた彼の肖像と奥さんを描いた2点があった。1点は菊地君、そしてもうひとつは私の作でたぶん彼が大切にしてお許しにおいてあったのだと思われる。

旅行中の癖で早く眼がさめてしまい、ホテルのロビーでぼんやりその日の行程を調べていると、「今日の計画の中に必ずヒンドゥテンプレルのフェスティバルをいれろ」とマネジャーと称する男が話しかけてきた。ネパール人らしくないそのあつかまじさに驚いたが、「数少ないフェスティバルをみれる君は実にラッキーだよ」といわれ車をチャーターすることに決めた。フェスティバルは午前中で終わるから急げと追いたてられるような朝食を済ませて外にとび出すと、浅黒い顔にネパール帽子（帽子）がびったりの運転手がカーローラ1,200ccのドアを優しく開けてくれ直ちにスタート。

車は山岳地帯をつつ走る。眼下にカトマンズ盆地が広がる、はるかにヒマラヤ連山の一角が純白にのぞく、あらん限りの傾斜地を利用しつくした様に耕されて天に至る段々畑、薪を2,3本頭にのせ、素足でゆったりと歩くサリーの女、牧歌的で気分は最高。

ふと、「マネジャーはがめついから気をつけろ」と運転手が教えてくれたが、実はマネジャーが自家用車で内職をしていることを感じてとり、一日のチャーター料150ルピー（4,500円）というのを100ルピーに値ざって車に乗っているのだから、こちらも結構ながめつさだ。

急に人の気配が多くなり車が止まる。カトマンズから20kmの地点、期待のダキシカリテンプレルだ。人里離れた小さなテンプレルをめざして何キロも歩いて来た人々が、押しあいへしあい繁みの中の細い道を降りてゆく。チベット系、インド系、中国系と顔つきは様々で

も、みんな熱烈なヒンドゥ教徒なのだ。ニンニクと線香とカレー粉を混ぜ合わせたような体臭、人々の念仏と耳をつんざくような鐘の音、むせかえるような熱気に圧とうされながら人垣をわけて御堂に近かついてみて、腰が抜ける程驚いた。辺り一面血の海。神にいけにえを捧げているのだ。こわいもの見たさに更に確かめると、人々が、横手の小川で洗い清めた羊や鶏を境内の中程にいる男にお金と共に渡すと、小脇にかかえて一瞬のうちに首を切りおとし、吹き出す血しぶきを石壁に彫まれた神像に吹きかける。プロの殺し屋だ。人々は血のりの上を素足でベタベタ歩きながら、自分の額や木の葉の皿のごちそうにべつとりと血を塗りつけ神に捧げて祈るのだ。やがて人々は、心安らかな表情で首のない血だらけの羊や鶏を、ドラム缶の熱湯でゆであげると、家族中で毛をむしりとり、小川の流れの中で腹を開らき、毛糸玉のように腸を巻きつけ蔵もつを分類し終ると各自の家に持ち帰ってその日はたらふく食べるのだそうだ。

インド各地でみたヒンドゥ教徒の祈りは、神像に赤い粉を塗りつけていたものが多かったが、ネパールに入ってきたヒンドゥ教は、山岳民族特有の土俗信仰と結合して、凄惨なフェスティバルに変化したのだろう。

インド旅行の疲れをネパールで休めるのが目的だったのだが、第一日目にして大変な衝撃を受けてしまい、以後は血しぶきを思い出して食事がのどを通らない破目になったのであった。



インド、ネパールの旅から

—— いけにえの話 ——

渡辺真利

会員からのえはがき

久 守 昭 嘉

— 私のパリ暮らし —

全く早いもので私がパリに来て二年が過ぎた。着いた当時の細やかな記憶はあまりないが、その頃の日記やメモを見ると、一日も早くパリに慣れることで懸命だったことが記されている。私には初めての海外生活であり、長い教員生活を離れたということもあって、不安と緊張で見るもの、聞くもの総てに神経をとがらせていたようだ。

迎える人もない夜の雨降るオルリー空港に降り立った時の心細さ、その時タクシーの運転手が片言の日本語で話しかけてくれ、道々セーヌ河やグランパレーなど教えてくれた時の安堵感は今も忘れられない。札幌を発つ前に、当時パリから帰ったばかりの岸本さんに与えられた予備知識は、翌日から役立って大そうありがたかった。以来リベリアホテルの住人になったが、モンパルナスの中央に位置し筋向かいに絵画研究所、絵具屋も軒を並べ、路地を出れば有名なカフェドーム、ロンドンなど深夜まで賑わっている。ホテルは60何室、そのほとんどが日本人画家で、同郷とか、また気の合った者同士往き来して、リベリヤ村などといわれるほど日本語で用が足りるところだ。トイレの共同なのは気がかりだがとにかく住みやすい。

食事ももっぱら日本食、イタリヤ米を炊き、週2回の露店市で魚、野菜などを買い、日本食品店の調味料で味つけをする。魚を開いて窓に干し、カブやキャベツの漬物をつくる。日本にいるより日本的なのだ。しかしワ

インだけはパリに住んでからその味を覚えたり、チーズも本場の味だ。

ところで仕事のことだが、初めは毎日なんの束縛も受けず総てが自分の時間であることが不思議に思われたものだ。そして、そのことが不安で自分を縛るように、毎日毎日朝早くから写生に歩き回った。8年間の車で弱った足、肥り過ぎた体重を引きずって歩き歩いて半年後、やっと念願の体力とパリに慣れることができた。それからパリ郊外や地方に足をのぼし、その後はユーレパスでヨーロッパ各地を巡ったりした。私のように風景画を好む者にとってヨーロッパはじつに魅力がある。パリ市内より郊外の方により心ひかれる。北海道の風景に似ていて、ポプラのある広々とした牧場、牛がのんびりと遊んでいるし、点在する建物や教会がなかったら錯覚をおこしそうだ。好きな絵を描いているのは楽しい。しかし美術館の名作に接するとき、心に思う何分の一も画面に出ないとき、苦しさだけが先立って、それでも描かないではいられない自分に腹立たしくなったりする。

日本のニュースは入らない、画壇の動きもわからない、パリぼけとかになったようだ。

これでパリの物価が安いのか、或いはたんまり金を持っているのか、そして意のままに絵筆が動いたら、ずっと居すわりたい気もするが、そのどれもがかなわない私なのでもうこの夏には帰るつもりだ。

